

# インドネシア 9月30日事件の歴史叙述 ——その形成と発展——

高 地 薫\*

## Historiography on the September 30<sup>th</sup> Movement in Indonesia: Its Birth and Development

KOCHI Kaoru

### Abstract:

This article explores the process where the historical narrative on the September 30 Movement was created in the 1960s, placed more general and academic context in 1970s, as well as detailed and systematized in 1980s to 1990s. The official historiography of Suharto regime on the September 30 Movement in 1965, which is still dominant even after the collapse of that regime, was basically established through the two books (co-) authored by Nugroho Notokusanto, the head of the Armed Forces History Center and historian at the University of Indonesia. The examination of the process and background of the compilation of those books reveals the close connection between the Army Staff and Command School with academic human resources. In addition, it shows that network also connected to the U.S., especially RAND Corporation. The narrative in those two books, was eventually extended into the compilation of the National History of Indonesia (*Sejarah Nasional Indonesia*, 1975). He revised the book with more detailed description of the September 30 Movement a year before his sudden death in 1985. His will to detail and systematize the historical narrative on the movement was accumulated a decade later.

キーワード： 9月30日事件、インドネシア、歴史叙述、軍と学術界

---

\* 神田外語大学 外国語学部アジア言語学科 講師

## 1. はじめに

インドネシアで1965年に発生した9月30日事件は、スカルノからスハルトへの権力移行の契機となったのみならず、今日もなお癒えない国民的トラウマとなっている。「9月30日事件」という呼称は日本におけるもので、インドネシア語では9月30日運動(Gerakan 30 September、英語では30 September Movement)と呼んでいる。9月30日運動とは、ウントゥン中佐率いる大統領親衛隊の一部が、陸軍首脳を拉致・殺害すると共に、別働隊が国営ラジオ局を占拠して自らの動きを「9月30日運動」と名乗った上で、「クーデターを謀る将軍評議会に対してスカルノ大統領を護るために先制攻撃した」こと、「革命評議会を結成し、スカルノを支持する」ことを放送した事件である<sup>1)</sup>。この運動自体は、事件直後に陸軍戦略予備軍スハルト中将(後の大統領)が陸軍を掌握し、運動をあっさりと鎮圧した。スハルトら陸軍指導部はこの運動を、インドネシア共産党(Partai Komunis Indonesia, PKI)による組織的・計画的なクーデター未遂事件と断定し、反共産主義感情を煽った。結果、それから半年ほどの間に、50万人もの共産党員やそのシンパとされる人々が虐殺され<sup>2)</sup>、それを遥かに上回る数の人々が法的プロセスを経ずに拘禁され、拷問されたりした。1966年3月11日には、スハルト配下の将官に迫られてスカルノは、実質的な権力をスハルトに移譲する大統領命令書を作成・署名した。むしろ、この大統領命令を強要し発行させたスハルトこそが、クーデタを成功させたことになる(白石、1997: 136; 倉沢、2014: 174)。

その後成立し、9月30日運動を共産党による組織的・計画的なクーデター未遂事件としたスハルト体制下では、事件後に起きた共産党員やそのシンパとされる人々への虐殺や法的プロセスを経ない拘禁もその解釈に基づいて正当化されて、不問とされてきた。1998年にスハルト体制が崩壊し、民主化が開始されると、スハルト時代に起きた政府・国軍による人権侵害事件の見直しが求められると共に、9月30日事件についての研究もインドネシア内外で進んだ。事件に関係する資料が限られ、また関係者のほとんどが亡くなってしまったなかで、Roosa(2006)は到達できる最も包括的な研究を行なった。またMelvin(2018)のように特定地域(アチェ)の虐

殺のメカニズムを明らかにした研究もある。

他方、スハルトを英雄視した公的史観、歴史叙述も批判の中心的トピックの一つとなった。Nordholt et. al. (2008) は、新体制下の歴史叙述問題を批判的に乗り越えようとするインドネシア内外の研究者による試みの一つの成果であり、Adam (2008a)<sup>3)</sup>は、新体制下における歴史叙述は国軍によってミリタライズ (militarisasi) されたのであり、それを主導したのはナスティオン (A. H. Nasution) 将軍<sup>4)</sup>であると批判する。McGregor (2007) は、スハルト新体制を支え、また軍イデオロギーを支える歴史言説の形成とその社会への流布を批判的に検討している。また Herlambang (2011) は、小説や映画などの媒体を通じて9月30日事件に関する公的史観が如何に流布され、事件後の暴力が正当化されてきたかを検討している。しかしながら、Adam (2008a) の論点は重要であるものの、「歴史のミリタライゼーション」プロジェクトの立案者であるナスティオンに注目しつつ、そのプロジェクトの実行者の役割を十分に検討していない。また McGregor (2007) は、そのプロジェクトの実行者の一人ヌグロホに焦点を当てつつも、国軍歴史研究所やそこにおけるヌグロホの働き、「歴史叙述のミリタライゼーション」プロジェクトに強調を置くものであり、そのプロジェクトが9月30日事件に関する歴史叙述に与えていく過程と影響は扱わない。Herlambang (2011) もヌグロホの文化的暴力の基礎となる歴史叙述を完成させたという側面に注目するものであり、その文化的暴力の一部を為すであろう歴史書には触れない。とりわけ後二者は、スハルト政権下での公定歴史観を完成させたヌグロホの役割を強調する一方で、彼の死後の歴史叙述の展開を見逃している。Roosa (2012) は、1994年に内閣官房が出版した9月30日事件の白書 (Setneg, 1994) など、ヌグロホ以降の歴史叙述を視野に入れたものの、その歴史叙述そのものの歴史的展開には触れていない。

本論文は9月30日事件に関する歴史叙述の、その黎明期から完成、そして展開を掴むことを目的とする。具体的には事件に関する公定史観を形作ることになる歴史叙述が、事件後数ヶ月で作られた過程とその背景を明らかにし、それがどのように発展し、完成されていったかを明らかにすることになる。中心となるのは、国軍による「歴史のミリタライゼーション」プ

プロジェクトの実働部隊となったヌグロホであり、彼がどのような文脈や人脈から、どんな意図をもってプロジェクトに関わるようになり、そしてどのようにインドネシアの学会を巻き込んで、その目的を達成したかを考察する。

## 2. 国軍歴史研究所の設立とヌグロホ・ノトスサントの活動

### 2.1. スハルト政権の公定史観と国軍歴史研究所

9月30日事件に関するスハルト政権の公定史観は、事件の発生から数カ月後に出版された『9月30日運動、40日の失敗』(Pusjarah, 1965)(以下、『40日の失敗』)において、おおよそ確立していた。国軍歴史研究所編纂となるこの書籍を実質上著したのは、ヌグロホ・ノトスサント(Nugroho Notosusanto)だった。彼はインドネシア大学文学部歴史学科の教員であり、国軍歴史研究所の所長を兼任していた。さらに三年後、軍の9月30日事件に関与した者を裁いた特別軍事法廷において検察官を務めたイスマイル・サレー(Ismail Saleh)と共に、『インドネシアにおける「9月30日運動」のクーデター未遂』(Notosusanto and Saleh, 1968)(以下、『クーデター未遂』)を英語で著して、『40日の失敗』で提示した見解を再確認した。これらの歴史叙述は、1975年から政府の公式歴史書として刊行された『インドネシア国史』(以下、『国史』)にもそのまま採用され、更に1984年に製作・公開された映画『共産党9月30日運動という裏切りの鎮圧(Penumpasan Penghianatan G-30-S/PKT)で更に広く社会に流布されることになる<sup>5)</sup>。

### 2.2. 国軍歴史研究所設立の経緯

実質的にヌグロホが著した『40日の失敗』は事件そのものの勃発からほんの3ヶ月後に発表されたにも関わらず、事件が共産党による国家権力奪取の試みだったと結論付けた。50万規模での虐殺や、スハルトによる実質上のクーデタという、より大規模な政治的混乱より以前に、事件に関する「公定史観」が生まれた理由は、ヌグロホが所長を務めた国軍歴史研究所設立の経緯を見ることによって明らかになる。

国軍歴史研究所は、1964年10月1日に国軍幕僚監部に設置された国軍歴史担当特別局が、翌年1月には改組されて、独立した研究所となったものである<sup>6)</sup>。ヌグロホは、特別局設置当初から1985年に急死するまで所長を務めた。国軍内に歴史問題を扱う特別局が設立された背景には1950年代インドネシアの政治状況、すなわちスカルノを支持し、その庇護下で躍進した共産党と、それに対抗する勢力の激しい対立があった。直接の契機となったのは、国軍とりわけ陸軍と共産党との歴史をめぐる対立だった。歴史担当特別局、そして歴史研究所の設立目的は、独立戦争中1948年に起きたマディウン事件に関する歴史叙述をめぐる共産党に対抗することであった (Dephankam dan Pusjarah, 1974: 1)。

マディウン事件は、インドネシア独立戦争の最中1948年に東ジャワのマディウンで共産党を中心とする人民民主戦線が権力を奪取した事件である。しかし、翌月には国軍主力部隊によっておおよそ平定された<sup>7)</sup>。

この事件は、対オランダ独立戦争中に共産党がインドネシア共和国を背後から撃った事件として、反共産主義勢力が頻繁に言及する事件となる。独立戦争終結、共産党と激しく対抗していたのは、イスラム政党マシュミ (Masjumi)、インドネシア社会党 (Partai Sosialis Indonesia) そしてマディウン事件を鎮圧した陸軍だった。1955年の第一回総選挙に向けた選挙戦においても、マシュミは共産党への攻撃にマディウン事件を大いに活用した (Feith, 1957: 13)。一方、独立戦争後に再建された共産党にとって、裏切り者の汚名を雪ぐことは生き残りをかけた最重要課題の一つだった。1951年には既に Mirajadi (1951) が機関誌に論文を発表し、後には書記長アイディットが自ら主張を著作にしていっていった (Aidit, 1955; 1957)。政党政治において、1960年に共産党に対抗していたマシュミおよび社会党が地方反乱に加わった廉で解散されると、共産党に対抗しうる政治勢力、歴史に関わる共産党の言論に対抗しうる政治勢力は国軍、とくに陸軍のみとなった。

一方で、歴史叙述をめぐる問題は、別の文脈において歴史家からも提起されていた。1950年代にはインドネシア人歴史家たちから、歴史教育の脱植民地主義化と、そのための民族主義的歴史叙述の必要性が訴えられはじめ、1957年には第一回歴史セミナーが開催された。インドネシア人歴史家に

よる歴史教科書およびそのレファランズとなる国史の必要性が確認されたものの、目立つ活動はできなかった(Nursam, 2008: 183)。この国史編纂は1970年代にようやく実現することになる(後述)。

国史の編纂は、結局、政治的な文脈において実現されようとした。1964年に催された国民戦線<sup>8)</sup>の会議において、インドネシア独立革命の歴史を編纂するべきであるという案が提出され、その内容に関して激しい議論が起きた。すでにスカルノ体制の一翼を担っていた共産党の代表は、国民戦線の編纂する歴史について、労働者と農民の役割を強調し、国軍の役割を等閑視した。ナスティオン将軍はじめ国軍代表はこれを受け入れるわけにはいかなかった。国民戦線が歴史書を編纂することが決定し、共産党のアミル・アンワル・サヌシ(Amir Anwar Sanusi)<sup>9)</sup>がそれを率いることになると、独立戦争への貢献を否定された国軍とナスティオンは、共産党の歴史言説に対抗する歴史言説を作り出す必要性を痛感した(Nasution, 1985: 419)。彼自身も歴史書を著してはいるが<sup>10)</sup>、ナスティオンは“プロ”の歴史家の助けが必要であると考えた。彼の命を受けたモコギンタ(Mokoginta)少将は、インドネシア大学文学部歴史学科の教員であるヌグロホとムラ・マルブン(Moela Marboen)を見出した。そして、ナスティオンの歴史プロジェクトを実際に推進していったのはヌグロホであった。

### 2.3. ヌグロホ・ノトスサントと陸軍指揮幕僚学校

国軍歴史研究所所長(1964～1985)、インドネシア大学学長(1982～85)、国民教育大臣(1983～85)を務めたヌグロホ・ノトスサントは、軍事史研究者であり、短編小説家<sup>11)</sup>であり、文芸批評家であり、また文民ながら陸軍准将の階級を与えられるなど、多様な側面を持つ人物であった。

ヌグロホは、1931年6月15日に中部ジャワのレンバンに生まれた。貴族の家系で、祖父も父も植民地政府高官だったため、ヨーロッパ人小学校に通った。1945年にインドネシア独立が宣言され、独立戦争が始まると、彼は学生軍(Tentara Pelajar)に参加した。独立戦争が終結すると、彼本人は職業軍人を選択しなかったが、ガジャマダ大学法学部教授となっていた父の希望を受け入れ、彼は学業に復帰、中等教育を終え、インドネシア大学

文学部に進んで歴史学を専攻し、1960年に修了した。

大学ではヌグロホは学生運動や学生国際交流に積極的に参加した。1952年には文学部学生自治会の会長となり、1954年にはインドネシア大学学生会議(Dewan Mahasiswa UI)を経済学部のエミル・サリム(Emil Salim)らと共に設立した。学生運動組織とその出版活動にいそしむ一方で、1955～56年にはジャカルタ学生運動(Gerakan Mahasiswa Djakarta)の総会長を務めた(Kasenda, 2010: 3)。国際交流においては、1959年にキッシンジャーの組織するハーバード国際セミナーに参加したことが特筆される<sup>12)</sup>。こうした活動を通じて、少なくともジャカルタの青年知識層には名の売れた存在となっていたようだ。なかでもエミル・サリムのように後に「パークリー・マフィア」と総称されるインドネシア大学経済学部を中心としたエコノミストとの人脈が1950年代にできていたことは、後年のヌグロホの人生に少なからず影響を与えたと考えられる。

1960年になると、ロックフェラー財団の奨学金を得て、翌年にロンドン大学アジア・アフリカ研究学院修士課程に留学したが、志半ばにして1962年に帰国し、インドネシア大学に復帰、そのまま歴史学科長となった。留学に先立って、インドネシア大学法学部の学生イルマ(Irma Savitri Ramelan)と結婚したが、彼女は、後に陸軍指揮幕僚学校(SESKOAD, Sekolah Staf and Comando Angkatan Darat)副司令官となり、ヌグロホとも深く関わることとなるスワルト(Suwarto)中佐の姪であった<sup>13)</sup>。

帰国後のヌグロホは文学からは遠ざかり、インドネシア大学での教務、運営<sup>14)</sup>をこなした。その一方で、これ以降の彼の経歴を形作ることになる陸軍との関与を深めていった。SESKOADで講義を持ったことはそのための重要な契機となった。

一方、スワルト中佐はアメリカ陸軍指揮幕僚学校への留学(1958～59)後、1959年頃SESKOAD副司令官となると、アメリカ留学から帰国したインドネシア大学経済学部のエコノミストを中心に、SESKOADで講義をさせた(Sundhaussen, 1982: 138-141; McGregor, 2007: 54)。これら講師陣は後にパークリー・マフィアと呼ばれ、スワルト時代に経済テククラートとして有名になった人材が中心であり、先述のエミル・サリムもその一人であ

る。経済学部のエコノミストによる SESKOAD の講義は 1957 年前後から始まり、1962 年頃に本格化した。これは丁度スワルトが、1950 年代からインドネシアでの経験と人脈を積み上げてきたギイ・J・ポーカー (Guy J. Pauker) に招かれて CIA のコンサルタント会社である RAND コーポレーション (RAND Corporation) を訪れた時期と一致している<sup>15)</sup>。その訪問時にスワルトは、RAND コーポレーションを手本として「国の学術界の人材をコンサルタントとして」組織することを思い付き、帰国後すぐに、それを実現しはじめたという<sup>16)</sup>。

そうした講師陣の一人で、しかし他とはやや毛色が違った講師がヌグロホだった。SESKOAD でのヌグロホの講義が始まった時期は確定できないが、その講義録 (Notosusanto, 1964) が公刊されている 1964 年 8 月 5 日には遅くとも始まっていた<sup>17)</sup>。スー・ホック・ギー (Soe Hok Gie) が 1962 年 12 月 31 日付の日記において漠然とではあるが、SESKOAD で学者と軍の協力が始まっていると記しており (Soe, 1983: 142-143)、彼がインドネシア大学歴史学科でヌグロホの学生であったことや、後に彼自身も国軍歴史研究所のプロジェクトに動員されたことを勘案すると、ヌグロホの SESKOAD への関与はイギリスからの帰国直後に始まった可能性もある。ヌグロホが講師に推挙された経緯は不明であるが、SESKOAD とインドネシア大学の関係が密接だったこと、ヌグロホがインドネシア大学において若手教員、運営者として評価されていたこと、ヌグロホと学生時代から交流し、SESKOAD と既に関わっていた経済学部教員たちへの身分照会でも問題がなかったであろうこと、スワルトと姻戚関係を持っていたこと、あるいは独立戦争に学生軍に参加していたことなどが複合的に影響したのであろう。

こうした背景から、ナスティオンが歴史記述をめぐる共産党との闘いにおいて「プロの歴史家」を求めたとき、モコギンタからインドネシア大学へのフォーマルなルートを通じて、そしておそらくはスワルトからナスティオンやモコギンタへの助言というインフォーマルなルートの双方を通じて、ヌグロホに白羽の矢が立ったのは自然な流れだった。

なお、時期的にはやや前後するが、こうして陸軍との関わりを深めるの



と軌を一にして、ヌグロホの研究対象は軍史、とりわけ日本軍政期に組織された祖国防衛義勇軍 (Pembela Tanah Air, PETA) へと移行していった<sup>18)</sup>。1968年には、1945年2月に東ジャワのブリタルで起きた PETA の反乱に関する研究を発表し、最終的に PETA に関する研究は 1977年の学位論文「日本占領下インドネシアにおける祖国防衛義勇軍」にまとめられた (Notosusanto, 1979)。SESKOAD そして国軍歴史研究所への関与は、ヌグロホの純粋な歴史家としての側面にも変化を与えたのである。

#### 2.4. 国軍歴史研究所でのヌグロホの活動

共産党に対抗する歴史観を提示するために成立した歴史チームは、最初の仕事として、「国軍版のインドネシア民族闘争史」に取り組み、反オランダ植民地主義闘争から 1960年代までを扱う『インドネシア民族武装闘争略史』(Mokoginta, 1964) (以下『闘争略史』) を出版した。本書はモコギンタ少将をリーダーとする四軍と国防省の代表、インドネシア大学の専門家からなるチームによって編纂されたことになっており、「技術的任務の遂行は、ヌグロホ・ノトスサントが扱った」(Dephankam dan Pusjarah, 1974: 1) とされてはいるが、技術的任務に留まらず中心的役割を果たしたのはやはりヌグロホであったと考えられる。

この本の出版はナスティオンと陸軍にとって、共産党の歴史観を国民戦線の歴史書として出版しようとするサヌシの試みに先んじた点<sup>19)</sup>、頒布先が限られていたとしても陸軍が共産党に反対する態度を明確にしえた点で大成功であった。この成功が、歴史特別局の設置、そして歴史研究所への発展につながった。

この本の出版後もヌグロホは精力的に国軍歴史研究所で活動していく。1965年3月には、兵士読物叢書 (Seri Bacaan Prajurit) として小冊子ながら軍事作戦記を 12冊も一度に発行している<sup>20)</sup>。この叢書で興味深いのは、これらの構成と著者である。叢書のうちヌグロホによる概説 (第一巻) を除く 11冊は、おおそ『闘争略史』の構成に従い、国軍の組織編成の歴史などを除いて、1945年以降の主要な軍事作戦を取り上げている。それぞれの軍事作戦につき『闘争略史』では数頁しか割り当てていないため、この叢書

は小冊子ながらも『闘争略史』の部分的な増補版と位置付けられうる。また両者の出版時期に間がないことから、『闘争略史』のために収集した資料がそのまま活用されたのは間違いなく、またヌグロホやマルブン以外の著者たちも『闘争略史』編纂に関わっていた可能性が高い。

その編纂には、インドネシア大学歴史学科の教員と学生が動員された。その学生には、スー・ホック・ギー、オンホッカム (Ong Hok Ham)<sup>21)</sup>、後にインドネシア大学歴史学科教授となる R. Z. レイリサ (R. Z. Leirissa)、その後国軍歴史研究所に勤務したロフマニ・サントソ (Rochmani Santoso) らがいた。後に『インドネシア国史』第5巻の編集を務めたユスマル・バスリ (Jusmar Bastri) と、アリウィアディ (Ariwiadi) も国軍歴史研究所との関係を保った。これら教員と学生がヌグロホの主導そして指導の下で叢書を仕上げたのである。

## 2.5. 『9月30日運動、40日の失敗』

この『闘争略史』および軍人読物叢書の編纂執筆過程は、9月30日事件の後に編纂・出版された『40日の失敗』の歴史叙述に関して二つの重要な役割を果たした。

一つは『40日の失敗』を編纂チームである。Adam (2008a:119) の挙げた編纂者のうち二人(ザイナブン・ハラハップ Zainabun Harahap とロフマニ・サントソ) は軍人読物叢書の著者であり<sup>22)</sup>、1964年以降の共同作業、協力体制によって、事件後それに直ぐさま対応できた。『国軍歴史研究所10年史』にある年譜 (Dephankam, 1974: 23) に従えば、事件後の10月、歴史研究所は所員を中部ジャワに送り、事件に関する資料収集にあたらせた。11月には軍幕僚作戦本部のチームに加わり事件の被害者となった陸軍将校の遺族にインタビューを行なうと共に、最高司令部情報部の設置したチームに加わって、共産党員から接収した文書の調査を行なった。これら調査に、ヌグロホはじめ文民の学者がどこまで直接関与したかは不明だが、陸軍軍人との密接な協力体制、そして収集された情報を効率よく分析処理するためのチーム、指揮系統はこのときまでにほぼ形成されていたのである。

第二に、歴史叙述の方向性である。『闘争略史』編纂の過程は、ナスティ

オンの部下たちとヌグロホら歴史家の間で、反共産主義的な歴史叙述の方法や方向性について議論する機会を用意したと考えられる。この機会を通じて、上記の歴史家と軍人の協力チームの間では、共産党はインドネシア民族の敵、裏切り者であり、国軍は民族の擁護者であることを前提とした歴史叙述の方向性は定まっていた。マディウン事件で共和国政府の背中を撃った共産党が再び共和国政府の転覆を図った、すなわち「インドネシア共和国建国以来二度までも、共産党は裏切った」、と<sup>23)</sup>。

『40日の失敗』は、創成期の国軍歴史研究所における歴史家と陸軍の密接な協力体制と人脈に支えられて、そこで形成されていた歴史観の延長線上に、事件後数ヶ月で出版されたのである。

## 2.6. 『コーネルペーパー』への対抗

インドネシア国外のインドネシア研究者も、当然のことながら、1965年10月1日未明ジャカルタで起きた政治的混乱、その展開と発展には注意を払っていた。アメリカでは、コーネル大学のインドネシア専門家、マクヴェイ (Ruth McVey)、アンダーソン (Benedict Anderson)、バンネル (Frederick Bunnell) が秘密裏に、9月30日事件を分析し、1966年1月には『インドネシアにおける1965年10月1日クーデターに関する予備的分析』いわゆる『コーネル・ペーパー』 (Anderson and McVey, 1971) を作成していた。この報告書は、9月30日事件の原因を陸軍内部の権力闘争に求めた。当初、この報告書は機密扱いにされていたが、1966年3月に『ワシントン・ポスト』紙がその内容を明らかにしてしまった (Anderson, 1996: 2)。インドネシア政府や国軍、そしてアメリカ政府は、『コーネル・ペーパー』に対抗する措置を取るようになる<sup>24)</sup>。

RAND コーポレーションのポーカーがまず動いた。彼は、インドネシア国軍の友人、SESKOAD のスワルトに、『40日間の失敗』の議論を整理し、強化した本を、アメリカを始めとした世界で理解してもらえるよう“英語で”執筆・出版するよう進言した (McGregor, 2007: 66-67)。スワルトはそれに応じて、1967年にヌグロホとイスマイルをRAND コーポレーションに派遣した。ヌグロホは歴史面を、イスマイルは特別軍事法廷の資料を用いて

法的側面を、そしてポーカーは政治面を執筆したとされる。こうして翌1968年には『クーデター未遂』(Notosusanto dan Saleh, 1968)が出版されるが、ポーカーの執筆部分は含まれなかった(Anderson, 1996: 3)<sup>25)</sup>。おそらく、アメリカ政府ないしCIAが関与した痕跡を消したかったのであろう。実際、『クーデター未遂』には、スワルトへの賛辞はあるものの、参考文献以外にポーカーへの言及はない。また『国軍歴史研究所10年史』(Dephakam dan Pusjarah, 1974: 23)では、ヌグロホとイスマイルが「9月30日事件の背景を説明するためにアメリカを訪問した」とだけ報告されているが、誰あるいはどの機関に対して何故説明がなされたのか、一切言及がない。

『クーデター未遂』が編纂・出版された第一の重要性は、ヌグロホが1965年に著した『40日間の失敗』におけるストーリーを、特別軍事法廷の資料という「客観的な資料」と共に改訂したうえ、国際社会、とくにアメリカを中心とした西側諸国に向けて英語で書かれたことである。これによりスハルト新政府の見解を国際的に喧伝することができた。それと共に、この本の制作過程は、インドネシアの歴史家とインドネシア国軍のみならず、更にアメリカ政府ないしCIAとの密接な繋り、この場合はヌグロホ、スワルト、そしてポーカーの密接な関係を暗示しているのである。

### 3. 公定史観の発展

インドネシア現代史の「ミリタリゼーション」プロジェクトは次の段階に入る。『40日の失敗』と『クーデター未遂』によって提示された9月30日事件の歴史叙述を、更にインドネシア政府およびインドネシアの歴史学会によるより公式な歴史にされていくことになるのだ。

#### 3.1. 『インドネシア国史』編纂

1970年代に入りスハルト新体制が安定しはじめると、1960年代以降滞っていた国史編纂が再始動した。1970年4月に教育文化大臣決定173号によりガジャマダ大学のサルトノ・カルトディルジョ(Sartono Kartodirdjo)を委員長とし、ヌグロホ・ノトスサント、アブドゥルラフマン・スルヨミハル

ジヨ (Abdurrachman Surjomihardjo)、スチプト (F. A. Sutjipto)、ウカ・チャンドラスミタ (Uka Tjandrasmita)、プハリ (Boechari)、スヨノ (R. P. Soejono) を委員とするインドネシア国史標準図書編纂委員会 (Patnitia Penyusun Buku Standar Sejarah Nasional Indonesia、以下では国史編纂委員会と言及) が結成され、高等教育機関で教科書として用いることができ、かつ初中等教育における歴史教科書の指針となりうる国史を編むこととなった (Siskel et. al., 2003: 123)。8月には1957年以来初の歴史セミナーがジョクジャカルタにおいて開催された。セミナーの構成自体が『インドネシア国史』の構成と対応するようサルトノが計画したものであり、ここで国史編纂の方針が話し合われた (Sartono, 1975: xii-xiv; Nursam, 2008: 186)。

この国史の編纂に参加したヌグロホに近い学者は、国史編纂には明確な「軍の任務」があったと証言している (Curaming, 2008: 364-5 n2)。ヌグロホ自身、「[...] 我々が小学校から大学までの公教育のための国民史の教科書編纂をマシュリ (Mashuri) 教育文化大臣<sup>26)</sup>に進言し」、1970年の大臣決定に至ったとしている (Notosusanto, 1971: vii; Adam, 2008b: 116 n9)。その進言の背景にあったのは、国軍歴史研究所の活動である。

1967年から国軍歴史研究所は、軍人読物叢書の出版を再開し、今回は軍の偉人伝を漸次出版している。更に重要なのは、1968年4月20日に歴史研究所を中心に陸海空警察四軍の歴史部局が一同に会し、軍人の歴史教育の一本化が図られたことである。この会議で、国軍/国防省における歴史訓練の実行とそのためのカリキュラム指針が定められた。翌5月9日には、軍の教育機関から代表が国防省に集められ、歴史カリキュラムについて話し合った。この結果、国軍/国防省歴史教科書の編纂が決定された (Notosusanto, 1971: v; Dephankam dan Pusjarah, 1974: 3)。ヌグロホは、こうした国軍における歴史教育計画策定における成功を、より一般的な歴史叙述および公教育に拡大しようとしたのである<sup>27)</sup>。

第二回歴史セミナーが終わると、国史編纂委員会のメンバーは作業に取り掛かった。ここでも、サルトノが中心となっていたが、ヌグロホの意向が大きく反映されることになる。

まず1971年には、7ヶ月にわたる海外での研究調査および資料収集が行

なわれた。インドネシア国内でもセミナー等の作業を繰り返し、1975年に『インドネシア国史』の初版原稿が完成し、1976年3月に出版された。サルトノは、この成果を大いに評価しつつも、編纂作業が30人以上の執筆者を抱えたため、一つの枠組みを参照しつつも、分析レベル、叙述スタイル、レトリック、説明の完全さにおいて不均衡になってしまったと悔んでいる(Kartodirdjo, 2001: 17)。

しかし、そうしたことは別の問題が、ヌグロホが編集責任者を務め、日本軍政期以降を扱った『国史』第6巻をめぐって起きた。出版の翌月には、古参のナショナリストであるB. M. ディアが、『国史』第6巻はスカルノ大統領の評価を不当に貶めていると『ムルデカ(Merdeka)』紙上で批判した(Diah, 1987)。サルトノはこうした批判が予想されたため、出版前に他の専門家や関係者によるチェックや、彼らを集めたセミナーの開催を提案していたが、ヌグロホはこれを拒否した(Nursam, 2008: 206-208)。一方で、ヌグロホが国軍歴史研究所で進めていた国防省／国軍歴史教科書の編纂では、出版が開始された1971年12月以前に、1970年12月、1971年9月と二度も原稿チェックのために会議を開催している(Depbankam dan Pusjarah, 1974: 28-9)。更にサルトノは、編纂作業に権力の介入はなかったとしつつも、第6巻に関しては、その執筆作業が軍に勤務する歴史家であるヌグロホの雰囲気を選び、それがまたヌグロホ自身に影響した、と迂遠な批判をしている(Nursam, 2008: 206-208)。

論争を巻き起こした『国史』第6巻を執筆したのは、ヌグロホ以外に、マルブン、アリウィアディ、ロフマニ、エミリア・B. ムシン・ウイスマル(Emilia B. Musin Wismar)、サレー・アサド・ジュマリであり、前四者は1964～65年には国軍歴史研究所に動員されており、後二者も1967年に軍人読物叢書で軍の偉人伝を執筆している(Depbankam dan Pusjarah, 1974: 24)。つまり、第6巻の編集チームは全員、それ以前から国軍歴史研究所と関わってきた、ヌグロホの強い影響下にある歴史家だった。ヌグロホは国軍で実施しようとしていた歴史教育と、その内容を熟知する身内の人材、そのための歴史叙述を、おおよそそのまま『国史』第6巻の叙述にも持ち込んだのである。

このサルトノとヌグロホの立場の違いは、1984年の『国史』第4版出版の際に、より明確な形になる。総編集者のリストからサルトノの名前が削除され<sup>28)</sup>、彼が執筆者でもあった第4巻の編集チームが総入れ替えとなった<sup>29)</sup>。『国史』編纂事業は、結局のところ、サルトノを委員長としつつも、その開始当初からヌグロホが直接的・間接的に決定権を握り、とりわけ現代史に関しては国軍の意向を体現したヌグロホらの歴史叙述、あるいは歴史観を「公定」のものとするには、ヌグロホより年長でインドネシアを代表する歴史家だったサルトノといえども、楯突くことは許さなかったのである。

### 3.2. 9月30日事件に関する歴史叙述の緻密化と体系化

『インドネシア国史』はスハルト体制期に三回とスハルト体制崩壊後に一度、改訂された。9月30日事件の叙述に関しては、スハルト体制下では、丁度サルトノの名前が総編集者から削除された第4版(1984)において大幅な改訂がなされている。

単純にワード数で見ると、「9月30日運動の鎮圧」と題する節が、第1～3版において約1200語であるのに対して、第4版では約4900語と四倍になっている。それだけ記述が詳細になったということであり、例えば第3版までは4行のみだった中部ジャワにおける9月30日運動とその鎮圧作戦の記述が、第4版では9頁、279行にまで増えている<sup>30)</sup>。註も第3版までは一つ、しかも『9月30日運動、40日の失敗』と『クーデター未遂』が参照されるだけだった。第4版では、19の註が付せられ、そのうち用語説明が一つ、新聞への参照が1、国軍の出版物への参照が9、国軍歴史研究所の出版物への参照が1、そして国軍歴史研究所所蔵の未公刊文書への参照が6となっている。

中部ジャワにおける9月30日運動(共産党の反乱)とその鎮圧作戦は『40日の失敗』および『クーデター未遂』ではすでに詳細に記述されていた。それが『国史』第4版になるまで加えられなかった理由は想像の域を出ない。1975年の時点では10年前の出来事が歴史として叙述するには新しすぎると、サルトノらから批判が出かねないと判断したのかもしれない

い。いずれにせよ、この増補によって、9月30日運動がジャカルタだけの事件ではなく、予め共産党によって広域にわたって組織的に計画されたクーデタであることが、「歴史的事実」として国の正史に記されることとなった。

### 3.3. 9月30日事件に関する歴史叙述の更なる発展

このような『国史』9月30日事件に関する歴史叙述の緻密化は、1985年のスグロホの死後、『国史』自体が長く改訂されなかったため、ここで終わった。次に『国史』が改訂されたのはスハルト体制崩壊後10年経ってからだった。

その一方で『国史』とは別に、1990年代に、二つの重要な書籍が公刊された。一つは、内閣官房が1994年に出版した9月30日事件に関する白書(Setneg, 1994)、もう一つは、スグロホ亡き後の国軍歴史センターが1991～95年にかけて出版した『インドネシアに忍び寄る共産主義の脅威』全5巻である(Pusjarah, 1995)。後者は、9月30日事件に限定したのではなく、植民地時代から1965年そしてそれ以降に至るインドネシアの共産主義を扱っており、1926～7年の反植民地蜂起、1948年のマディウン事件、1965年の9月30日事件と共産党による「一連の反乱、武装蜂起」を扱っている<sup>31)</sup>。

『国史』では、叙述の緻密化が進められた第4版を含めて、ジャカルタおよび中部ジャワの「反乱」とその鎮圧が記述されただけだった。この白書と『共産主義の脅威』第4A巻において、インドネシアのほぼ全域における共産党による権力奪取の試みとそれに対する国軍の鎮圧作戦が体系的に整理されている。これによって、9月30日運動は、ジャカルタおよびジャワ島だけではなく、共産党の計画したインドネシア全体における反乱であったと明確に位置付けられることになった。スハルト体制の公的史観と、9月30日事件に関する歴史叙述というスグロホの遺産は、彼の死後10年ほどを経て、ここに緻密化と体系化の一つの頂点に達したのである。



#### 4. 最後に

スハルト体制崩壊後、批判されつつもいまだ維持されている、9月30日事件に関するスハルト体制の公定史観、そしてそれを生み出す人的・組織的体制は、1965年の事件後数ヶ月で書かれた『40日間の失敗』、そして『コーネル・ペーパー』に対抗して書かれた『クーデター未遂』によってほぼ完成した。前者が編纂された背景には1950～60年代の共産党と陸軍の間にあった歴史叙述をめぐる争いがあり、それを契機とした国軍歴史研究所の設立とその活動がその編纂自体に大きく貢献することとなった。更にその背後には、1960年代前半に成立していた、陸軍とりわけその指揮幕僚学校と、学術界とりわけインドネシア大学の研究者たちの間の密接な協力関係があり、更にその関係はアメリカの財団やRANDコーポレーションにまでつながることを、『クーデター未遂』の執筆過程は示唆している。

国軍歴史研究所で生まれた歴史叙述をヌグロホは、自らの働き掛けで『国史』編纂を始動させ、より公のものにしようとした。特に現代史の編纂は、国軍歴史研究所の人脈で牛耳り、陰に陽に影響力を行使し、その外部からの干渉を一切拒絶して、それを実現した。彼の死後、1990年代に極まった9月30日事件の歴史叙述の緻密化と体系化は、ヌグロホの遺志を體現したものだったとも言えよう。

では、そのようにして「完成」した歴史叙述は、その後、特にスハルト体制以降どのような変化を被ったのか、あるいは被らなかったのか、最後に簡潔に触れておく。

先述のようにスハルト体制崩壊の10年後、2008年に『国史』の改訂が行なわれた。その十年の間に、9月30日事件に関しては、歴史叙述に限らず、NGOによる聞き取りなど様々な調査が行なわれ、人々の関心も高まっており、現代史に関しては大きな見直しが期待されていたが、9月30日事件に関して根本的な改訂は、結局なされなかった。また本論文では論じなかったものの、公教育における歴史教育でも、2004年教育カリキュラムが9月30日事件に関する多角的な視点を提供するように促したことで、これに対する反対運動が起き、最終的にはこのカリキュラムに沿った教科書が発禁処分になるという混乱があった。

9月30日事件から半世紀、スハルト体制崩壊から20年近くを経てもなお、ヌグロホと国軍歴史研究所の生み出し、彼の死後にも緻密化されてきた歴史叙述は、大きな影響力を保っているのである。

注

- 1) 現在のところ9月30日運動についての最も包括的な研究は、Roosa (2006) である。事件の推移については、Fic (2005) に良くまとめられている。日本語では倉沢 (2014) を参照されたい。
- 2) 虐殺被害者の人数は正確には分からない。50万人という数字は、Crib (2001) の計算による。
- 3) 彼はインドネシア学術院 (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia, LIPI) の研究員であり、1998年以降スハルト公定史観批判の急先鋒となり、多くの新聞および雑誌記事、論文、著作を発表している。
- 4) ナスティオンは共産党にとっては不倶戴天の敵の一人で、9月30日運動における拉致・殺害のターゲットとなるも唯一生き延びた。
- 5) この映画については、Herlambang (2011: Chap. 6) が詳細な分析を加えている。
- 6) 国軍歴史研究所はこのあと今日までに数度その名称に変更があったが、本論文では特に必要のない限り、便宜的に一貫して「国軍歴史研究所」として言及する。
- 7) マディウン事件については、Swift (1989) を参照されたい。
- 8) 国内の政治勢力を結集し、(1) インドネシア革命の完遂、(2) 国家建設、(3) 西イリアンの解放を目的として、1959年にスカルノが大統領令により設置した組織。共産党などの政党や、国軍が加わっていた。また、当時ナスティオンは、スカルノに疎まれて、実働部隊を持たない国民戦線を担当する職に追いやられていた。
- 9) 1950年代に歴史教科書などを著したアンワル・サヌシとは別人である。アミル・アンワル・サヌシについては、McGregor (2007: 49-59) を参照されたい。
- 10) ナスティオンは1952～55年にかけて取り組んでいたインドネシア独立戦争史に、1962年閉職に終わった後に再び取り組み、1970年代になってから出版されている (Nasution, 1985: VII-VIII)。
- 11) 学生時代に、ヌグロホは文芸誌に短編小説を発表し、文芸誌の編集者を務め、若手文学者として有名にもなっていた。Rosidi (2010: 409) によれば、1950年代に広く文学界がその意見に注目した若手文学者二人のうち一人がヌグロホで、インドネシアを代表する文芸批評家 H. B. ヤシンは彼らの文学思想家・批評家としての将来を嘱望していた。
- 12) McGregor (2007:46) および Kasenda (2010: 3)。後者は、ヌグロホは文学者とし

## インドネシア 9月30日事件の歴史叙述

て参加したと書いているが、学生運動の指導者として選ばれたと考える方が自然であろう。またフレンドもスグロホがハーバードで学んだことがあると指摘している (Friend 2003, 133)。

- 13) McGregor (2005: 217; 2007: 56, 253 n83) および Herlambang (2011: 95)。二人の出会いは政略的なものではなく、学生運動を通じてであった (Kasenda, 2010: 5; 筆者の Ilma へのインタビュー)。
- 14) 1963年に文学部学生担当副学部長、翌1964～67年には学生担当副学長を務めた。(Kasenda, 2010: 5)
- 15) スワルト、およびポーカーと RAND コーポレーションについては、Horton (2017) を、RAND コーポレーションについてはアベラ (2011) を参照。
- 16) Ransom (1974: 102)。ラスット (Lasut, 2009: 411) によると、1966年3月15日に彼とスー・ホック・ギーと面会した際、スワルトは自分が SESKOAD のカリキュラムを変えたと言っている。
- 17) 1960年代後半には、陸軍のみならず海軍、空軍、警察の指揮幕僚学校でも講義を持つことになる (Kasenda, 2010: 7)。
- 18) 1960年に提出された学部卒業論文のテーマは「ジヨクジャカルタ：18世紀半ばのインドネシア王宮都市の形成」であった (Kasenda, 2010: 4)。
- 19) 『国軍歴史研究所10年史』では、「モコギンタのチームは〔…〕、結局、アンワール・サヌシのチームより早くその任務を終えた。」(Dephankam dan Pusjarah, 1974: 1) と誇っている。
- 20) Dephankam dan Pusjarah (1974: 22-23)。30頁ほどあるスグロホの SESKOAD における歴史学講義 (Notosusanto, 1964) を除けば、残り15冊は12～16頁である。また、McGregor (2007: 114-5) は、この叢書が計画されたのは1968年の国軍歴史研究所と四軍の歴史担当部との会議においてであったとするが、後述のように、その会議で決定されたのは国軍／国防省歴史教科書叢書の編纂であり、この軍人読物叢書とは別のものである。
- 21) 皮肉なことに彼は1966年に左翼の嫌疑をかけられ半年投獄された。その嫌疑を晴らし、釈放させたのはスグロホだった。(Reeve, 2007; Adam, 2008b: 501)
- 22) 他の二人エミリア・バキ・ムシン (Emilia Baki Musin) とリビア・スジヨノ (Lybia Soedjono) も1967年に軍人読物叢書を執筆した (Dephankam dan Pusjarah, 1974: 24)。
- 23) 『インドネシア国史』の全ての版に掲載されている9月30日事件の被害者の遺体の写真に付せられた文言である。(Marwati and Nugroho, 1975: 124; 1977: 127; 1984: 588; 2008: 488)
- 24) Anderson (1996: 4) は、『『コーネル・ペーパー』がインドネシア陸軍首脳部と同じくらいアメリカ政府の一部を激怒させた』ことに触れている。
- 25) 後に発表された RAND コーポレーションのメモランダム (Pauker, 1969) が、

- 『クーデター未遂』に含まれなかったポーカーの担当部である、あるいはその改訂版である可能性がある。
- 26) マシユリは9月30日事件当時スハルトとは近所に住んでおり、事件の翌朝、ナスティオンが襲撃されたいとスハルトに伝えた人物であり(LSIK, 1983: 100)、スハルトとは近い仲だった(Crouch, 1978: 212)。
  - 27) 本論文では扱わないが、『国史』出版後にヌグロホはユスマル・パスリと共に中学校・高等学校用の歴史教科書を執筆している。
  - 28) しかし、各巻に収められたサルトノによる「前文」は手付かずだった。
  - 29) 第4巻の編集チームは、第3版まではスチプト(F. A. Sutjipto)を長とし、テェ・キアン・ウィー(Thee Kian Wie)、サルトノ、ジョコ・スルヨ(Djoko Surjo)だったが、第4版ではレイリサを長とし、ナナ・スルリアナ(Nana Nurliana)、アンハル・ゴンゴン(Anhar Gonggong)、ワルディニングシー・スルヨハルジョ(Wardhiningsih Soerjohardjo)、スハルト(Soeharto)とインドネシア大学歴史学科の若手研究者に入れ替わった。
  - 30) ただし、一部東ジャワの記述も紛れている。
  - 31) この中で、1926～7年の反植民地蜂起は明らかに性格の異なるものであるが、共産党の暴力性を示すために三つの事件を並べることは、この本以前からあった(例えば、LSIK, 1983)。

#### 参考文献

- アベラ、アレックス(牧野洋訳)(2011)『ランド～世界を支配した研究所～』文藝春秋
- Adam, Asvi Warman (2005) "History, Nationalism, and Power." In Vedi R. Hadi and Daniel Dhakidae (eds.) *Social Science and Power in Indonesia*. Singapore: Equinox Publishing. pp.247–273.
- (2008a) "Militerisasi sejarah Indonesia: Peran A.H. Nasution." In Nordholt, Henk Schulte, et al. (eds.) *Perspektif Baru Penulisan Sejarah Indonesia*. Jakarta: Obor, pp. 111–124.
- (2008b) "Penutup: Sartono Kartodirdjo dan Onghokham: Dua gaya melawan Orde Baru." M. Nursam, et al. (eds.) *Sejarah yang Memihak: Mengenang Sartono Kartodirdjo*. Yogyakarta: Ombak, pp. 500–507.
- Aidit, D. N. (1955) *Aidit Menggugat Peristiwa Madiun (Pembelaan D. N. Aidit dimuka Pengadilan Negeri Djakarta, Tgl. 7 Februari 1955)*. Djakarta: Jajasan "Pembaruan".
- (1957) *Konfrontasi Peristiwa Madiun (1948); Peristiwa Sumatera (1956)*. Djakarta: Jajasan "Pembaruan".
- Anderson, Benedict R. O'G. (1996) "Scholarship on Indonesia and Raison d'Etat: Personal Experience." *Indonesia*, 62, pp. 1–18.
- Anderson, Benedict R. O'G. and Ruth T. McVey (1971) *A Preliminary Analysis of the October 1,*

## インドネシア 9月30日事件の歴史叙述

- 1965 *Coup in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Modern Indonesia Project.
- Cribb, Robert (2001) "How many deaths? Problems in the statistics of massacre in Indonesia (1965-1966) and East Timor (1975-1980)." In: Wessel, Ingrid and Georgia Wimhöfer (eds.) *Violence in Indonesia*. Hamburg: Abera, pp.82-98.
- Crouch, Harold A. (1978) *The Army and Politics in Indonesia*. Ithaca: Cornell Univ Press.
- Curaming, Rommel A. (2008) "The Contrasting Calculus of Power in Sejarah Nasional Indonesia (SNI) and the Tadhana Project." In M. Nursam, et. al. (eds.) *Sejarah yang Memihak: Mengenang Sartono Kartodirdjo*. Yogyakarta: Ombak, pp. 364-401.
- Dephankam dan Pusjarah (Departmen Pertahanan-Keamanan and Pusat Sejarah ABRI) (1974) *Sepuluh Tahun Pusat Sejarah ABRI*. Jakarta: Departmen Pertahanan-Keamanan dan Pusat Sejarah ABRI.
- Diah, B. M. (1987) "Sejarah Nasional Indonesia harus tahan uji." *Meluruskan Sejarah: Kumpulan Karangan*. Jakarta: Pustaka Merdeka, pp.1-20.
- Feith, Herbert (1957) *The Indonesian Elections of 1955*. Ithaca: Modern Indonesian Project, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Fit, Victor M. (2005) *Anatomy of the Jakarta Coup: Oktober 1, 1965*. Yayasan Obor Indonesia: Jakarta.
- Friend, Theodore (2003) *Indonesian Destinies*. Cambridge: Belknap Press.
- Herlambang, Wijaya (2011) *Cultural Violence: Its Practice and Challenge in Indonesia*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller GmnH & Co. KG.
- Horton, William Bradley (2017) "Guy Pauker and US-Indonesia Relationships of the 1950s-70s." 『アジア太平洋討究』,29, pp.85-104.
- Kartodirdjo, Sartono (2001) *Indonesian Historiography*. Yogyakarta: Kanisius.
- Kartodirdjo, Sartono, Marwati D. Poesponegoro dan Nugroho Notosusanto, eds. (1975) *Sejarah Nasional Indonesia VI: Jepang dan Zaman Republik Indonesia*. Edisi Pertama. Jakarta: Balai Pustaka.
- (1977) *Sejarah Nasional Indonesia VI: Jepang dan Zaman Republik Indonesia*. Edisi ke-2. Jakarta: Balai Pustaka.
- Kasenda, Peter. 2010. "Nugroho Notosusanto Di Antara Baju Sipil Dan Militer," <https://www.scribd.com/doc/40116710/Nugroho-Notosusanto-Di-Antara-Baju-Sipil-Dan-Militer>, uploaded on Oct 26, 2010 (2016年2月14日閲覧).
- 倉沢 愛子 (2014) 『9・30 世界を震撼させた日—インドネシア政変の真相と波紋』 岩波書店
- Lasut, Jopie (2009) "Menyongkong 'Hari Kebangkitan Mahasiswa' 10 Januari Sekali Lagi Soe Hok Gie." In Rudy Badil, et. al. (eds.) *Soe Hok Gie... Sekali lagi*. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia, pp. 304-412.
- LSIK (Lembaga Studi Ilmu-ilmu Kemasyarakatan) (1983) *Rangkaian Peristiwa Pemberontakan Komunis di Indonesia 1926-1948-1965*. Jakarta: Lembaga Studi Ilmu-ilmu Kemasyarakatan.

- McGregor, Katharine E. (2005) "Nugroho Notosusanto: The Legacy of a Historian in the Service of an Authoritarian Regime," in Surbuchen, Mary S. (ed.) *Beginning to Remember: The Past in the Indonesian Present*. Singapore: University of Washington Press, pp.209–260.
- (2007) *History in Uniform: Military Ideology and the Construction of Indonesia's Past*. Honolulu: Asian Studies Association of Australia in association with University of Hawaii Press
- Melvin, Jess (2018) *The Army and the Indonesian Genocide: Mechanics of Mass Murder*. New York: Routledge.
- Mirajadi (1951) "Tiga Tahun Provokasi Madiun." *Bintang Merah*, Aug.-Sept. 1951, pp. 39–52.
- Mokoginta, A. J. (ed.) (1964) *Sedjarah Singkat Perdjangan Bersendjata Bangsa Indonesia*. Jakarta: Kelompok Kerdja Staf Angkatan Bersendjata.
- Nasution, A.H. (1985) *Menempuh Panggilan Tugas, Jilid 5: Kenangan Masa Orde Lama*. Jakarta: Gunung Agung.
- Nordholt, Henk Schulte, Bambang Purwanto, and Ratna Saptari (eds.) (2008) *Perspektif Baru Penulisan Sejarah Indonesia*. Obor, Jakarta.
- Notosusanto, Nugroho (1964) *Hakekat sedjarah dan azas2 metode sedjarah : kuliah dihadapan siswa2 SESKOAD, 5 Agustus, 1964*. Seri batjaan peradjurit, No. 11. (Djakarta) : Mega Bookstore, (1964).
- (1968) *Pemberontakan tentera Peta Blitar melawan Djepang, 14 Pebruari 1945*. (Djakarta): Departemen Pertahanan-Kemaman, Lembaga Sedjarah Hankam.
- (1971) "Pengantar Umum." In Djamhari, Saleh As'd. *Ikhtisar Sejarah Perjuangan ABRI (1945 – sekarang)*. Cet. 3. Jakarta: Markas Besar Angkatan Bersenjata Republik Indonesia, Pusat Sejarah dan Tradisi ABRI. 1995 (1971). pp. v–viii.
- (1979) *The Peta army during the Japanese occupation of Indonesia*. Tokyo: The Institute of Social Sciences, Waseda University.
- Notosusanto, Nugroho and Ismail Saleh (1968) *The Coup Attempt of the "September 30 Movement" in Indonesia*. Jakarta: Pembimbing Masa.
- Nursam, M. (2008) *Membuka Pintu bagi Masa Depan: Biografi Sartono Kartodirdjo*. Jakarta: Komaps.
- Pauker, Guy J. (1969) *The Rise and Fall of the Communist Party of Indonesia*. Memorandum RM-5753-PR. Santa Monica: The Rand Corporation.
- Poesponegoro, Marwati D. dan Nugroho Notosusanto (eds.) (1984) *Sejarah Nasional Indonesia VI: Jepang dan Zaman Republik Indonesia*. Edisi ke-4. Jakarta: Balai Pustaka.
- (2008) *Sejarah Nasional Indonesia VI: Jepang dan Zaman Republik Indonesia*. Edisi Pemutakhiran. Jakarta: Balai Pustaka.
- Pusjarah (Pusat Sejarah Angkatan Bersendjata) (ed.) (1965) *40 hari Kegagalan G-30-S 1 Oktober - 10 November*. Djakarta: Pusat Sejarah, Angkatan Bersendjata.
- Pusjarah (Pusat Sejarah dan Tradisi ABRI) (ed.) (1995) *Bahaya Laten Komunisme di Indonesia*. 5 Jilid. Cet. 2. Jakarta: Pusat Sejarah dan Tradisi ABRI. (Cet. 1, 1991).

インドネシア 9月30日事件の歴史叙述

- Ransom, David (1974) "Ford Country: Building an Elite for Indonesia." In Steve Weissman et. al. (eds.) *The Trojan Horse: A Radical Look at Foreign Aid*. San Francisco: Ramparts Press, pp. 93–116.
- Reeve, David (2007) "Ong Hok Ham, 1933-2007," *Inside Indonesia*, 90: Oct-Dec 2007. <http://www.insideindonesia.org/ong-hok-ham-1933-2007> (2016年3月31日閲覧).
- Roosa, John (2006) *Pretext for Mass Murder: The September 30th Movement and Suharto's Coup D'Etat in Indonesia*. Madison: University of Wisconsin Press.
- (2012) "The September 30th Movement: The Aporias of the Official Narratives." In Douglas Kammen and Katharine McGregor (eds.) *The Contours and Violence in Indonesia, 1965-68*. Singapore: NUS Press. pp.25–49.
- Rosidi, Ajip (2010) *Mengenang Hidup Orang Lain: Sejumlah Obituari*. Jakarta: KPG, 2010.
- Setneg (Sekretariat Negara Republik Indonesia) (1994) *Gerakan 30 September Pemberontakan Partai Komunis Indonesia: Latar Belakang, Aksi dan Penumpasannya*. Jakarta: Sekretariat Negara Republik Indonesia.
- 白石 隆 (1997) 『スカルノとスハルト——偉大なるインドネシアをめざして』岩波書店
- Siskel, Suzanne E., et. al. (eds.) (2003) *Celebrating Indonesia: Fifty Years with the Ford Foundation 1953-2003*. n.p.: The Ford Foundation in association with Equinox Publishing.
- Soe, Hok Gie (1983) *Catatan Seorang Demontran*. Jakarta: LP3ES.
- Sundhaussen, Ulf (1982) *The Road to Power Indonesian Military Politics, 1945–1967*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Swift, Elizabeth A. (1989) *The Road to Madiun: The Indonesian Communist Uprising of 1948*. Ithaca: Cornell University Southeast Asia Program Publications.